

# 3回もお墓が建った！

そのだ ひさこ

20年前に私は絵本『いのちの花』を自費出版した。3年前には、その英語版も出版した。英語訳は古くからの友人、イアン・ニアリーさん(元オックスフォード大学教授)にお願いした。詩は私自身の創作、絵は『原爆の図』で世界的に著名な丸木俊さん作である。5年間くらいの追っかけて「いのち」があふれるような絵を描いていた。80代半ばで描いてくださったので、彼女の20冊の絵本の最後の作品となった。

この絵本は福岡県内のある「むら」(被差別部落)に残る史実と伝承を基にしている。江戸時代後期、芝居小屋で酔っ払った武士を打ち据えた5人の客がいた。武士の面目をつぶされた黒田藩は、犯人を絶対捕まえないければならなかったが、誰も口を割らず捕まえることができなかった。ついに、「むら」に犯人を差し出すよう厳命を下し

た。さもないと、むら全体を焼き払ってしまうと。当時、厳しい身分制度の下、「むら」の人々は、断腸の思いで5人の若者を差し出さざるを得なかった。その結果、1800(寛政12)年に、5人の若者(14歳〜20歳)が無実の罪をさせられ、処罰されたという話である。

その在所のお寺に5人の名前と年齢を書いた本物の過去帳が今も残っている。この5人のお墓は1929年に初めて建立され、次は175周年の1974年に。2016年に建立された3番目の墓にはこの5人衆に関する「いわれ」や経過のすべてが刻み込まれている。3回も建てた墓、「むら」の人々の思いはいかばかり！「むら」を救ったこの5人衆の墓には毎年、他府県からも数百人の方が現地学習に訪れる。昨年11月、市の「人権尊重のまちづくりサポーター養成講座」の館外学

習で市民の方々32人が訪れた。講座では、①『いのちの花』の原画鑑賞と私の朗読、②「むら」の明治4年の解放令、明治6年の筑前竹槍一揆の焼き討ち、その後の居住地拡張と自力の学校建設の運動をテーマにした映像の鑑賞。最後に、③絵本を通して学習した中学生の自由な感想画を見ていただいた。

参加者の感想をいくつか紹介すると、「まだまだ知らないことがたくさんある」「実際にあったことを孫たちにも話したい」「知らないことはゼロではなくマイナス」「中学生の子どものたちの絵は心に刻まれた」「感想画は想像を超える豊かな感性だった」などである。墓地では、歴史を刻んできた4メートルを超す巨大な墓に、みんなで深く頭を垂れた。その墓碑は、「寛政義民松原五人衆之墓」として、今も大切にされている。

●TUNAGU IIとは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所副理事)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当